

外来種ヨーロッパザラボヤの道内の分布状況について

〇はじめに

ヨーロッパザラボヤは、2008年以降、噴火湾の養殖ホタテガイや施設に大量付着し、施設沈降、ホタテガイ脱落および付着物処理費の増大等の問題をもたらし、漁業者を悩ませている新しい外来種です。本種は、青森県、岩手県および宮城県でも発見されており、東北地方の二枚貝養殖漁業においても問題視されています。道内においても、噴火湾以外の海域で新たな漁業被害が発生する可能性があり、その分布状況の把握が必要とされています。函館水産試験場では、関係機関と連携し、ヨーロッパザラボヤの道内における分布状況の把握に努めています。

今回は、これまでの調査結果を元に、現在明らかとなっているヨーロッパザラボヤの分布状況についてまとめます。なお、ホヤ類は同定の難しい分類群であり、特に外観からの正確な同定は不可能とされています（図1）。そのため函館水試では、同定依頼を受けたサンプルは、金森ら（2012, 北海道水産試験場研究報告81, 151-156）に従い、鰓嚢内部の微細構造の観察および卵形態の観察により同定を行っています。

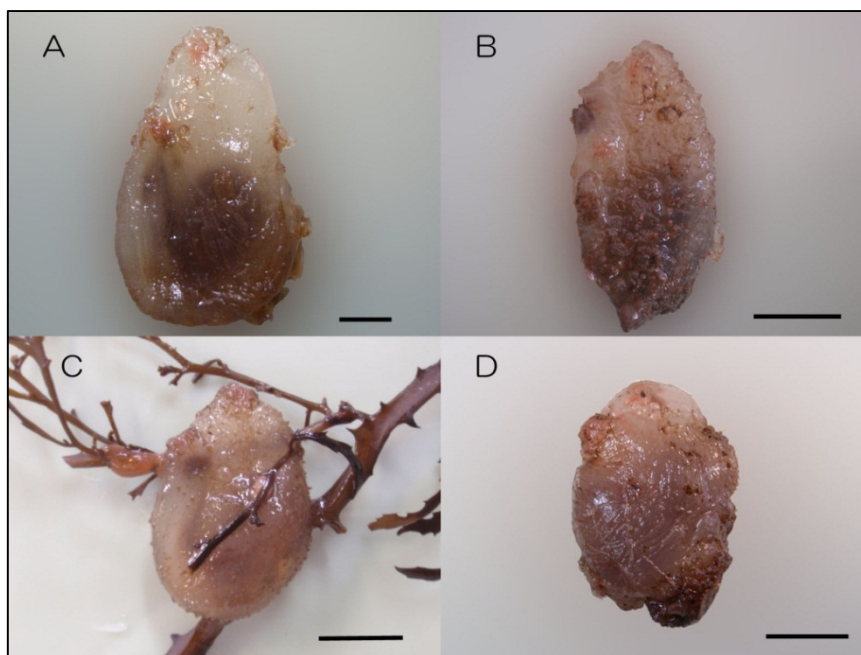


図1. 各地で採取されたヨーロッパザラボヤ

A. 北海道噴火湾（養殖ホタテガイに付着）、B.北海道日本海産（カキ殻に付着）、C.北海道津軽海峡産（海藻に付着）、D.北海道太平洋産（漁具に付着）。スケールは10mm。被嚢（外側の皮）は半透明、入水孔、出水孔付近に赤色の色素が見られます。付着している場所により形状は変化するため、外観からの正確な種の判定は困難です。

〇ヨーロッパザラボヤの分布状況

①噴火湾におけるヨーロッパザラボヤ分布状況について

これまで水産技術普及指導所と連携し、8地点で養殖ホタテガイに付着するヨーロッパザラボヤの調査を行いました。噴火湾では、調査を行った全ての地点でヨーロッパザラボヤが見つかり、全湾的に問題となっています（図2）。

②噴火湾以外の海域におけるヨーロッパザラボヤ分布状況について

これまで、北海道庁、各地区の水産技術普及指導所および水産試験場と連携し、18地点からヨーロッパザラボヤが疑われるサンプルを入手しました。このうち8地点のサンプルがヨーロッパザラボヤでした(図2)。二枚貝養殖が行われている海域を中心にサンプルが採取されているため、情報が不足している海域もあり、今後の調査が望まれます。

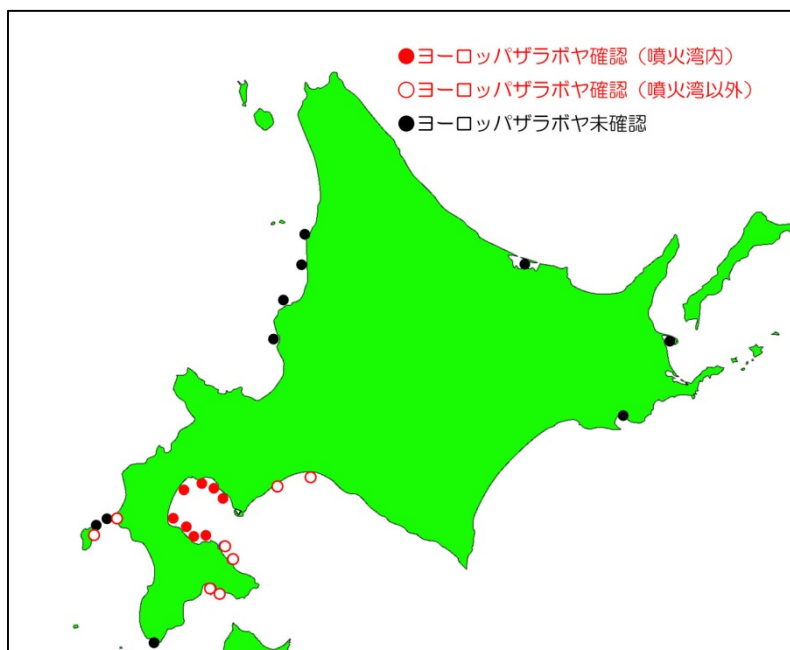


図2. ヨーロッパザラボヤの分布が確認されている地点

噴火湾については、函館水試および水産技術普及指導所で、ホタテガイに付着するヨーロッパザラボヤの調査を行っています。また、噴火湾以外の海域については、北海道庁が策定した調査要領に基づき、ヨーロッパザラボヤが疑われるホヤが発見された場合、函館水試にサンプルが送付されることとなっています。なお、図の●は、サンプルを入手したが、ヨーロッパザラボヤではなかった地点を示しています。

○今後の課題

ヨーロッパザラボヤは、えりも以西太平洋海域～日本海南部海域(胆振総合振興局、渡島総合振興局、檜山振興局管内)で確認されています。一方、漁業被害の発生については、噴火湾内の養殖ホタテガイ漁業に限定されています。ヨーロッパザラボヤは、港湾内や静穏な内湾で大量付着するホヤとして知られており、津軽海峡や日本海など外海で行われている二枚貝養殖漁業においては、噴火湾で見られるような被害は起きにくいと考えられます。ただし、外海に面していても、静穏な港内では局所的に大量付着が起きる可能性があります。ヨーロッパザラボヤの分布が確認されている海域において、港内で漁獲物の長期間の畜養や放流用種苗の中間育成を行う際は、注意が必要です。また、北海道では噴火湾だけでなく、道東でも静穏な海域(内湾、汽水湖および港湾内)を利用した養殖漁業が行われています。これらの海域にヨーロッパザラボヤが侵入した場合、噴火湾同様に深刻な漁業被害が発生する可能性があります。

残念ながら、浮遊幼生期を持つ海洋の外来生物の分布拡大を完全に止める有効な方法はありません。それでも、ヨーロッパザラボヤの侵入を促進するような漁業活動(分布海域からの二枚貝等の移動)はできるだけ控えることが必要です。また、疑わしいホヤが発見された場合は、すぐに最寄りの水産技術普及指導所、水産試験場に相談して下さい。それにより、万が一、侵入した場合も早期発見により、深刻な被害が発生する前に対策の検討が可能になると考えられます。

(函館水産試験場 調査研究部 金森 誠)